

伊勢崎署占領事件

— 小林多喜二の思い出 —

私は毎年春三、一五記念日が近づく、必ず小林多喜二のことを思い出し、伊勢崎警察署占領事件を回想する。私は小林多喜二とは一度しか会っていない。だからいま、仮りに多喜二が生きているとしても、私の顔も、私の名前も、覚えてはいないだろう。しかし多喜二も、あの事件だけは、おそらく忘れてはいないと思う。それは、私達の古い仲間の間で『伊勢崎署占領事件』と呼んでいる戦争前としては、常識上ちょっと想像もできないような珍しい事件だからである。何しろ、警察の不当弾圧に激昂した民衆が、警察署を占

領し、署内にアンペラ箆を敷いて、座りこみ、一時は署長以下全署員を、警察の建物外に追い出してしまったという事件である。しかも、それが、満州事変の勃発する直前の昭和六年九月六日の出来事で、天皇制ファシズムが、日本全土に荒れ狂っている最中の事件であるから、戦争前の無産運動に経験をもつ者にとって、到底信ぜられないであろう。しかし、それが歴史に上現実にあつたことなのだから、誰だって驚かない筈はない。

尤も後で詳しく述べるような事情で、この事件の真相は（警察署占領の事実）は当時の新聞には、一切発表されなかった。ただ警察が、真相をかくすために、問題の核心にふれないニュースとして、紳士協約を破って一方的に一部新聞（別項上毛新聞記事参照）に材料を提供した為、可なり事実をゆがめた型では報道されている。だから真相を知っている者は、時の群馬県警察当局とこの事件に参加した関係者だけで、一般には、余り知られていない。

私は戦争前、前後七―八回留置所や刑務所に、ブチ込まれたが、この時だけは、留置所の中で威張り散ら

し「うな井をもつてこい」と怒鳴り、留置所の中と外と相呼応して、革命歌を唱い、英雄になったような気分にはひたつたものである。このように警察を一時的に世よ占領するという大事件であるにもかかわらず、一人の犠牲者も出ず、ただ一―二晩留置所へプチ込まれただけで、誰も取調べもうけず、調書もとられずに釈放されたという珍事件でもあった。

昭和六年九月といえは群馬県では四年に一回の県会議員選挙が行われる年で、投票日の二十五日を目標に、保守、革新各派の候補者が出揃い、舌戦の火蓋が切られていた。この日(六日)午後六時から群馬県伊勢崎町南町にある共栄館という集会場で、文芸講演会が開かれることになっていった。主催者は、この地方の革新無産政党を網羅する文化人グループで、講師は小林多喜二、中野重治、村山知義、三好久子その他であった。小林多喜二、中野重治、村山知義といえは、当時日本プロレタリア文壇の最左翼であるナツプ(全日本無産者芸術団体協議会の略称)に属し、その中堅作家として活躍していた。就中小林多喜二は、小説「蟹工船」や「不在地主」で全国的に名声を挙げ、その筆

法はプロレタリア文学に新しい時代(社会主義・リアリズム)を画したものといわれ、およそ文学を語る者で、その名を知らない者はいない程有名であった。また三好久子は、築地小劇場の前進として将来を嘱望されている若い女優であった。

これだけのメンバーが揃ったということは、群馬県下では、未だかつて無かったことであるから、この文芸講演会は、開催日の前にして俄然爆発的人気を呼び、前売り券(二十銭)の売れゆき状況から二―三百人しかはいれない共栄館では、おそらく聴衆を収容し切れまいという前景気であった。

しかしそれだけ群馬県警察当局にとっては、頭痛の種で、泉二郎特高課長以下鳩首、その弾圧方法を考え、できることなら、これを開催させまいと企んでいたに違いないのである。

いよいよその日がきた。果して聴衆は、午前中から詰めかけ、中には遠く高崎、渋川、富岡、藤岡、沼田辺りから舟当持参でこの千歳一週の日ナツプ作家の講演を聴こうとはるばるやって来た人もあり、定刻の六時に早くも聴衆は場外に溢れるという盛況であった。

これより先、講師の連絡係りとして、菊池盛男(私の従弟で戦後日本共産党伊勢崎市議となる)菊池敏清(菊池一族の宗家の当主で当時ナツプと関係があり、この同志の紹介で多喜二以下の講師を招聘することが出来た。またその後徳永直、江口渙、鹿地亘三氏もこの地に足をいれている)両君が深谷駅まで出迎え、車中で将棋を指していた一行を見つけ、案内して本庄駅に下車したのであった。ところが二人の怪しい男が駅頭で一行を待ちうけていた。埼玉県警察部から派遣された特高刑事である。一行が二台の自動車に分乗すると、くだんの二人のスパイは、凶々しくも権力を笠にきて、一人づつその車に乗り込もうとする始末に一行は怒り且つあきれて、当然のことながら、それを峻拒すると二人の特高は、スゴスゴと引き下り、バソを掻くなど、早くも小林多喜二一行の身辺には、緊張した空気が醸し出されたのであった。

この日の計画は、まず最初講師一行を、大本家の菊池敏清同志宅に招き、ここでこの地方の尖鋭分子二、三十名だけの内々の集会を開き、茶話会という名目で、小林多喜二から非合法に関する話を聞くことが実は、

私達小数の者のほんとうの狙いであって、講演会の方はこれを胡魔化するための煙幕にすぎなかったのである。そのため文芸講演会の方は、治安警察法に基き、開会24時間前に政治集会届けを伊勢崎警察署長宛提出入註Vしておいたのであるが、モチロンこの小集会の方は、お茶を飲み、夕飯をたべるだけということに胡魔化す方針であった。また胡魔化せるものと甘く考えていたのである。しかしここで私達主催者の大きな誤算があったのである。考えて見れば小林多喜二の如き著名な日本共産党員を中心とする集会を警察が、それがどんな小さい集会であろうと、それを眼こぼしする筈はなく、これが公然たる大弾圧の口実になったものとは後になって後悔したものである。

さて一行が、午後一時頃、茶話会々場である菊池敏清宅に到着したので、私達ちは門の外まで一行を出迎えたのであるが、おどろいたことには一行中築地の女優さん二人の外は、洋服など着ている者はなく、みな無造作な白衤着流し姿で袴などもはいている者はモチロンなかった。九月始めのことでもまだ残暑が厳しい頃であつたから、考えて見れば別に不思議なことでは

ないのである。

いまでも覚えているのは、多喜二が座敷の床柱を背にして、あぐらを掻き火のない大きな火鉢を前にして腕組みをして話をつづける姿である。その顔は赤旗の三、一五記念号などによく出てくるあの写真の顔そっくりで、年よりずつとふけていて、当時とても二十八才の青年には見えなかった。私が畜種製造業小林邦作という名刺を差し出し、自己紹介すると、多喜二は、興味深そうに私の名刺に見入っていたが、やがて私の顔を見返し、ニコリ笑って名刺を袂に入れた。その時『僕は名刺をもっていないので』と多喜二は云った。

その日多喜二がどんな話をしたか私はすっかり忘れてしまったが敏清同志の記憶によると『台所と文学』という題であったという。だからその話は、その日多喜二が演壇でしゃべる内容を、そのままおさらいしたにすぎず、私達が期待した共産党の秘密に属するものではなかったと思われる。また多喜二ほどの人がこんな場所ですんなり冒険をおかす筈はなかった。

さて多喜二の話は約一時間位でおわり、外の二人の

作家からも何か話があったから、午后四時頃一行はすぐ近く七〇米ばかり離れた通称新殿（しんでん）と呼ばれている菊池盛男宅にゆき、みようがの味噌汁に舌鼓を打って夕飯をたべた。その味噌汁がうまいと云って何ばいも、お代りを重ね大鍋一ぱいを平げたという話（盛男の妹はる子の話）が、いまでも同家の語り草になっている。

その日の小集会に出席した人で、現在私の記憶に残っている者は、菊池盛男（前伊勢崎市議）、同敏清（ロカル紙社長）、渋沢広吉（仲買業）、吉田庄蔵（元潮流社長）、斎藤力（故人）、竹内幸作（牛乳販売業）、中野幸一（整型業）、真下真太郎（飲食業、元読売記者）、弥野寺清（農業）、同撰三（製菓業）、岡田熱（農業委員）、同宝司（全通所属組合員）、島田登司、正金寺忠作（戦後日共境町議）、下田壬二等で皆私の同志であり、伊勢崎地方の解放運動の先駆者である。

一行が、夕食を済ませ、会場に戻って一ふくしていると、門の外が急に騒しくなったと思ったとたんに、二台のトラックが止り、正服正帽あご紐着剣の武装警官二、三十人がトラックから飛び降り、おなじみ伊勢

崎署の私服特高の指揮の下に、会場めがけて突込んできた。おきまりの大乱斗とり、吉田庄蔵、渋沢広吉両氏、外二三の同志は免れたが、他は殆ど全部一網打尽にやられてしまった。ただ菊池盛男君だけは、夕食の後片づけで少しおくれたので、この時は一応検束から免れた。検束の理由は無届集会であった。私はここで始めて、弾庄の口実を与えてしまった自分の不用意と考えが甘まかったことに気づき地団駄を踏んだが、もう間に合わなかった。これで当日の演説会は、警察の思うつぼとなり、九分通りはブチ壊され、警察側の勝利が予想された。確かに講演会は警察の不当な弾庄によって、潰された。しかし大衆は負けなかった。

検束された私達は、すぐ留置所にブチ込まれたが、何にしる人数が多いので警察でも処置に困り、五つ位ある房に押しこんでも収容し切れず、斎藤力君の如きは、警察事務室の板敷のまん中に監視つきで座らせるという始末であった。それでも流石に東京からきた講師一行は、保護室に容れて礼をつくした。そういう中で何故か私だけは、ただ一人独房に容れられた。その房は、留置場一番手前の第一号室で、前にも容れられ

たことがあり私にとってはなじみの部屋であった。一方演説会場の方は、定刻をすぎても開会にならないので、聴衆の不満はようやく爆発しようとしているとき、講師をふくめ主催者側が総検束されたという第一報がもたらされた。その第一報は、後の潮流社長の吉田庄蔵氏によってである。続いて、検束の網をくぐり抜けて会場に駆けつけた菊池盛男君が演壇に駆け上り詳しい報告をしようとすると、これを阻止し、同君を検束するため、五、六人の警官が演壇をとりまく騒ぎに、聴衆は総起ちとなり、『警官横暴！』『話を聴け！』『警官をやっつけろ！』など叫ぶ者もあり、この騒ぎの中で菊池同志は

『俺はこれから伊勢崎署に、不当検束されている小林多喜二、中野重治、村山知義の諸先生や同志を奪還にゆくんだ。自ら進んで警察にゆく俺を検束する必要はない。』

と警官の手をふり切りながら叫んだが、遂に捕ってしまい、伊勢崎署に連行された。共栄館から警察まで二〇〇米位の距離があるが、

『俺のあとから一五〇人位の聴衆がついてきた。その

時俺は背後で（頑張れ！）と叫ぶ声を聞きながら、警察の玄関に入ったがすぐには、留置所に放りこまれないで、奴等の監視下におかれた』

と盛男同志は当時を回想している。

その頃から、伊勢崎署の周辺は、だんだん騒しくなってきたのが、留置所の中からも感ぜられた。留置されている方も、それに勢いずいて、足をバタバタして床を踏み鳴らしたり、『早く出せ！』『演説会を潰すつもりか？』などと怒鳴ったりした。

私は演説会がどうなったか、心配でならなかった。

それからどの位の時間がすぎたろうか、外はすっかり暗くなったようで、夜の闇が深まるに従って外の様子は、いよいよただならぬ配が感じられた。押しよせた群集は数百人少くとも三、四百人は下らないと想像される大衆のざわめき、怒号、喚声が聞えた、その声は段々留置所に近ずいてくるように感ぜられた。誰が指揮をとっているのか、相当の圧力を警察当局にかけていることは、たしかである。留置場の入口には一人の番人が、内から鍵をかけ、椅子に腰をかけているのが、私の房から見えた。何か心なし沈痛の面持ちの

参加し、眼の前で、この光景を見ている――

その時、留置場入口の鍵が開いて、一人の金ピカの高級警察官が、私の房の前へ近づいてきた。私のよく知っている泉特高課長であった。彼は黙って私の房をのぞいた。これは昔警察の上層部や検事がよくやったことで、自分でひুকった者を誇らしげに顧み、ザマを見ろといわぬばかりに力を誇示して、留置所のぞきに来たもので戦争前の天皇制官僚のわるいクセであった泉特高課長ののぞき込みである。私のいままでの感激は、いっぺんにフン怒に変わり、留置所から去りゆく、泉特高課長に向って

『うな井をもってこい。何んのための検拳だ！』と浴びせかけた。泉はちよつと首を傾けたが、そのまま、出て行った。

泉特高課長が去って五分とたたないうちに、警察署の内外は、俄然大騒動がもち上ったように感ぜられた。とにかくどちらかの側か、なだれを打って相手側に襲いかかったような配が感じられたがそのあとは、喚声と怒号、もみ合い、なぐり合うの大乱斗となり、修羅場と化したのである。

ように見える。外に警官の姿は見えなかった。

そのうち、外からよく揃った革命歌の合唱の音が響いてきた。これをうけて留置所の中からも、期せずして、外の声に合わせて革命歌を唱い出した。私も、唱った。他の房からも力強い革命歌が漏れた。こんなことは、かつて私の経験したことのないことである。留置所の中で革命歌を唱う。しかも大衆と共に！私は、これだけで感激に身がふるえるのを覚えた。外の声はI W・Wの歌に移った。モチロン、留置所もこれに呼応した。しかし私は感激のあまり、その第一節すら、満足に唱い切れなかった。

あとで判ったことであるが、群集が革命歌を唱った時は、かれらが無血警察署を占領し、署内に座りこんで、その勝利の感激にひたつた時であったのである。

しかし、この感激はあまり長くは続かなかった。

一旦退いた警察側は陣容を整え泉特高課長直接指揮のもとに逆襲に転じてきた。それは後年血のメーデーに労働者が皇居前広場を占拠し、喜びに万才を叫んで、はつとひと息した[△]注△あの瞬間のように思われる。

注一後年筆者は雑誌潮流社の一員として、血のメーデーに

これは留置所を出てから聞いたことであるが、この大乱斗の中で、警察官の肩章がいくつももぎとられ、帽子がうばわれるという事件が起きた。これは単なる偶然のできごとでなく、いまでも判らないが、誰かすぐれた戦術家がいって、幾人かの人に指令を発し肩章と帽子を奪うことに全力を注がせたに違いないと思われる。

もみ合うこと数回で戦いは二時間余でおわった。勝負なしの引き分けであった。

その夜動員された無産党員の数はどの位であったかは留置場の中にいた私には判らない。三百人ともいわれ、四百人ともいわれるが、当夜県下無産党員の非常動員の責任を一身に引きうけて、電話連絡に受話機をもちつづけた人が、誰れあろう、後年千葉銀行事件で全国に名を馳せた女傑レインボー主人こと坂内みのぶ女史（当時吉田庄蔵氏夫人）の若き日の姿であった（註）。尚この日の動員された者の中に喧嘩商賈の香具師五、六人程が潜入していたのを知っていた者はあまり多くなかったようである。モチロンこれもあとから聞いたことであるが、私の古い同じ茂呂村の同志で当

夜大活躍した渋谷広吉という非常につき合いの幅の広い人で、普段から香具師と連絡のあった人が、動員した、ともいわれる。だから例の警官の肩章と帽子に眼をつけたのはこの香具師の一团であったかも知れない。また誰か半鐘を鳴らして、この非常事態を町民に知らせたという人もあるがこれは確認されていない。

その夜、当時の吉田みぶ女史の活躍による電話連絡によって非常招集された者の中で指導的役割を果たした主な人は、石井繁丸（弁護士元社会党代議士で現在前橋市長）、佐田一郎（現佐田建設社長）、遠藤可満（戦後社会党県会議員）、坂内一登司（元日共群馬県委員長）、源源寿（同上）、の諸氏であった。

さてその夜時間が経つにつれて刻々と警察官が全県下から非常招集されて、大衆が警察の外に押し出され大乱斗が最終的に収まったのは午前二時頃であったといわれるが、私は昼からの疲れで騒ぎのさい中に寝入ってしまった。その時刻は記憶していない。ただ、何時頃か、うまいカツ丼が留置場に届けられ、生れて始めて留置場で舌鼓を打ったのを覚えている。しかしこれが果して私がウナ丼を出せと怒鳴ったため警察でフン

発したのか、それとも気の利いた同志がいて差し入れてくれたのかは、いままもって判らない。

結果として、警察側は大衆を署から退散させたので物理的には一応勝利を取めたのであるが、帽子や肩章を失った者や、顔や手足に怪我をした者もあり、仮りに一時的にせよ、大衆に警察を占領されたという弱身があった。一方大衆側としては小林多喜二など講師以下十数名の人間をとられている弱身があつて、どうしても、これを釈放させなければ面目が立たない。とくに東京から来た講師には申訳けないという立場にあつた。それで石井弁護士を筆頭に、遠藤可満、吉田庄蔵、渋谷広吉の諸氏が代表で、泉特高課長、伊勢崎警察署長に面会し、留置されている者の釈放方を交渉したのは当然であつたが、警察側もこれを渡りに舟と話し合いに応じ、（尤も話は逆に警察側から妥協をもちかけたという説もある）両者の間に紳士協約が成立した。

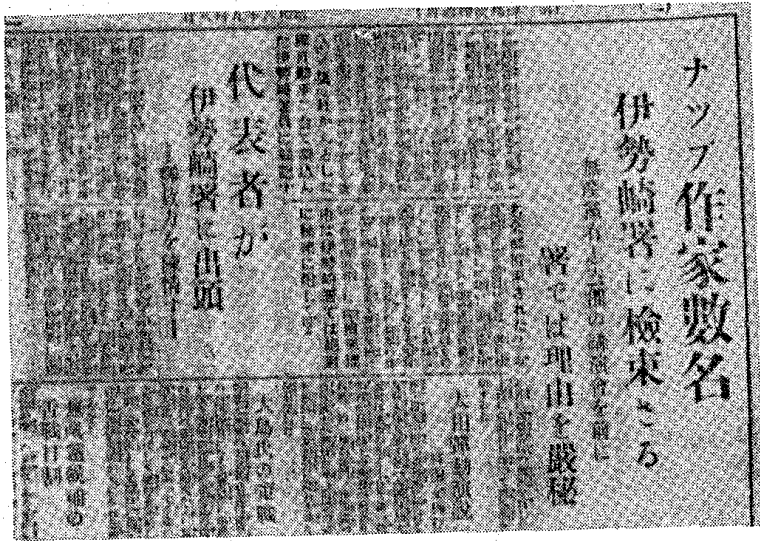
- ①（吉田、坂内、渋谷氏らの話）その協約は、
らも新聞に発表しないこと
- ②犠牲者を出さないこと

③留置されている者をすぐ無条件釈放すること
といわれる（右同上）

その結果であろうか？東京から来た小林多喜二以下の講師は翌朝早く釈放され、私達ち地元のものも七日夕刻までに釈放されたが何故か私は二晩留められ、翌々日の昼頃何んの取調べも受けず、調書もとられず、別に理由もなく、ただまんどんと釈放された。私が警察に検査されて、一回の取調べも受けず調書もとられずに、帰されたのは、これが最初で、最後であつた。

（昭和27年3月15日作 42年6月補筆）

さてこの事件は、当時から今日まで三十六年の間、関係者（私達ち仲間）の間では、新聞には何事も（ニュースとしても）発表されなかつたものと信ぜられていた。それは警察との紳士協約があつたので、誰も新聞などには出ないものと、決めていた為、あまり新聞に注意したものがいなくなつたものと思われる。そのため事件のあつた年も月も記憶している者はなかつた。私は文芸講演会に前売り券を発行した位であるから、講演会開催の記事位のニュースは新聞に出ていたに違



昭和6年9月8日上毛新聞 夕刊 (200-1参照)

いないと見当をつけた。見当をつける上で二つが指標になった。一つは県会議員の選挙運動が行われていたさい中であること。一つは暑い頃であったという私の記憶である。群馬県ではずっと前から、県会議員の選挙は四年おきの偶数の年の九月廿五日に行われることとなっていた。(大正十二年九月私が第一回の群馬共産党事件で検挙された当時も恰度県会議員の選挙期間中であつた)。そうなると同後の事情から昭和六年以外にないと見当をつけ、本年六月数回前橋図書館にゆき調べた結果上毛新聞に出ている別項記事を発見し、問題を突き止めることができたのである。この関係記事は別掲(200P—202P)のようなもので、モチロン警察占領の真相にはふれていないが、警察側が自分達の過失(不利な点)をおおいかくすために一方的な発表を行ったことが明かである。

- ① 九月十日の記事で私達ちを取調べ中とあるが、私達は何も取調べをうけずこれがまず第一のウソである。
- ② 同八日の記事で釈放を陳情嘆願したがはねつけられたとあるが、はねつけられた事実はない。また嘆

願したのではなく、両者共に対等の立場で交渉したのである。

私は、当時に回想し、単なる文芸講演会が何故あんな大きな事件に発展したのか不思議に思っているが、結局それは群馬県の警察部が小林多喜二や中野、村山氏らの影響力(即ち日本共産党の)を、極度に恐れていた為さい初から演説会を演ず計画であつたこと以外ならないといまでも固く信じている。

註①—この集会の届出について、真下慎太郎氏は、『菊池君(盛)も斎藤君も成年(満21才)に達していなかったので僕が届を出したそのためか二日置かれた』と語っている。

註②—坂内みのぶ氏は前橋市の坂内一登司氏の妹で、前橋女学校卒業後、昭和四、五年の頃同級生四十五人を集めて、共産党宣言の研究会をつくり、私とその講師として、同氏宅の二階で秘密裡に研究をつづけたほどの活動家である。

尚本稿を発表するに当って、正確を期すため、別掲「伊勢崎署占領事件の真相を語る座談会」を開催する一方座談会に出席できなかった有力関係者の談話をいただいたので併せてご覧願いたい。

記者

参考新聞記事

ナップ作家数名

伊勢崎署に検束さる

無産党有志主催の講演会を前に

——署では理由を厳秘——

伊勢崎町無産党青年有志主催プロ作家文芸講演会は、六日午後七時頃伊勢崎町共栄館において開会されたが、此より先弁士として東京より村山知義、小林多喜二、中野重治三氏外ナップ作家男女三名は、自動車で来崎し、労農大衆党伊勢崎支部員小林邦作、斎藤力、菊池利義（敏清の誤り—筆者）の諸氏と共に佐波郡茂呂村大字下茂呂支部員菊池盛男方で晚餐を取り、午後六時会場に赴かんとした際、自動車二台で乗込ん

丸氏外代表者数名は三度び伊勢崎署に出頭釈放方を陳情した。

（同上）

検束者は

既に東京に送還

黨員も夕刻までに釈放

ナップ作家検束騒ぎ

（夕刊所報）東京から来たナップ作家小林多喜二外数名及び佐波郡内無産黨員小林邦作氏外数名の検束騒ぎについて、その理由は伊勢崎署で絶対秘密に附しているのが判然しない。尚七日朝八時頃石井繁丸外代表が釈放願いに出頭する前自動車で本庄町に送り、東京に帰還釈放したものと解される。尚郡内黨員はおそくとも正午までに釈放される模様である。

（昭和六年九月九日上毛新聞朝刊）

伊勢崎署検挙者八日釈放

既報伊勢崎署に検挙された佐波郡無産黨員小林邦作

だ伊勢崎署員に前記十名全部検束されたので菊池盛男氏外支部員代表は、同署に検束理由を質しに赴いた所同氏も検束される騒ぎあり、県特高課員数名総動員の活動で同署は、ものものしい緊張を呈した。之れが為講演会には弁士が骨抜きとなり、支部員一同は狼狽し、二百余名の聴衆の為、間に合せ弁士を充て講演会をつづけ、同十時半頃閉会した。尚検束理由は伊勢崎署では絶対に秘密にしている。

（昭和六年九月八日上毛新聞夕刊トップ記事）

代表者が伊勢崎署に出頭

——釈放方を陳情す——

別項ナップ作家六名と労農大衆党伊勢崎支部員五名検束に依り、支部員は急遽前橋本部に報告と同時に応援を求め同夜石井繁丸、遠藤可満両氏を始め十数名自動車で駆けつけ、これに合体した支部員五十余名は、再び伊勢崎署に出頭し検束理由を質し、これが釈放方を嘆願したがはねつけられ、七日午前二時頃まで頑張りつづけたが、同署では又も検束の態度に出た為、己むなく引上げ、善後策を協議し、同日午前八時石井繁

氏外五名は取調中であつたが、八日夜いづれも釈放された。(同年九月十日上毛新聞夕刊)